HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	市民社会の本質把握の方法 ： 『独仏年誌』・『パリ草稿』
Author(s)	宮崎, 隆志
Citation	社会教育研究, 6, 71-84
Issue Date	1985-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28449
Type	departmental bulletin paper
File Information	6_P71-84.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

市民社会の本質把握の方法

――『独仏年誌』・『パリ草稿』――

宮崎隆志

1. はじめに

周知のように，マルクスは『経済学批判』序言において「市民社会の解剖学は経済学のうちに求められなければならない」と述べている。本稿は『経哲手稿』（以下『手稿』と略）を中心に，「市民社会」に現象する諸関係をマルクスがどのように「解剖」していったのかを検討するものであるが，その際の課題は以下の通りである。

第一に，『手稿』の方法をマルクスが経済学研究に際して立てた課題（『経済学批判』序言における「私を悩ました疑問」）との関連で理解すること，第二に，この時期のマルクスの方法において中心的な位置を占めると思われる「疎外された労働」概念について，その意義を検討すること，第三に，以上の検討を通じ，「生産関係」概念の形成，或いは物象化論と疎外論との関係について予備的な考察を行うこと，である。

2. 経済学研究の課題

本稿では『手稿』の課題設定に至る経緯を『ユダヤ人問題のために』（以下『ユダヤ人問題』と略，引用は国民文庫の頁数），『法哲学批判序論』（以下『序論』と略，引用は国民文庫）を通して検討する。以下で確認するように，これらの著作は，「政治的解放」後の近代社会の諸矛盾を「市民社会」の矛盾として把握しなおしていく過程を示すからである。

マルクスは『ユダヤ人問題』第一論文において，「古い市民社会」の政治的解放は政治的国家と市民社会の分裂，シトワヤン・類的生活とブールジョア・個人的生活の分裂，矛盾をもたらしたとする。すなわち政治的解放により，国家は「（古い）市民社会」から解放されたが（宗教からも），それは両者の二重化をもたらしたにすぎず，決して市民社会それ自体の解放＝人間的解放をもたらすものではなかった。そして，何よりの問題は，この「二元論」的状況の下で，類的生活が個人的生活の手段となり，個人的生活こそが，人間の本来のあり方，目的とみなされるに至っている点である。

マルクスはここでは「人権」を例にあげている。即ち，「公民の権利（droits du citoyen)」と区別された「人間の権利（droits de l'homme)」，いわゆる人権なるものは市民社会の成員の権利に他ならないとし（例えば，自由の人権とは私的所有の人権であり，平等とはそのような「自由」の平等であり，安全とはエゴイズムの保障に他ならない），そうである以上，そこでは，市民社会の成員が

「人間」と見做されるにいたっていると指摘する。何故，政治的共同体を創設しはじめた民族が，共同体から切り離された人間の権利を宣言するのか。これは「一つの謎」であるが，さらに政治的解放者自らによって，政治的共同生活が人権なるものの保持の手段とされ，公民がエゴイスト的人間の下僕とされ，「とどのつまりは公民（citoyen）としての人間ではなくて市民（bourgeois）としての人間が本来のそして本当の人間を解されるにいたるのを見ると」（『ユダヤ人問題』，p307），その謎は一層深まる。換言すれば目的と手段の関係の逆転，さらにその意識への反映という「謎」である。

この転倒，即ち市民社会の転倒構造を解明すること，これがマルクスが経済学研究を開始する際の最大の課題であったと言ってよかろう。第一論文においてすでに，二重化した一方（市民社会）が目前にある直接的確実性の対象であり，感性的な，もっとも身近なあり方であるが故に，自然的対象，自然的土台，本来的人間とみなされる，つまり類的側面が素材的側面の属性とみなされるという指摘を見ることはできる。しかし，問題はそれらを自然的，本来的と見做しても何ら矛盾が生じないかの如く存在する現実的関係，それ自体の転倒，矛盾を解明することである。市民社会の「解剖」とはこのことに他ならない。

マルクスは第一論文の末尾において「人間的解放」の条件について述べる際，その一つとしてルソーのいうところの人間に「固有の力」を社会的な力と認めてこれを組織することをあげているが，ここでは「自然的かつ独立的な在り方」における個人に属するかのようにみえる力が，実は社会的な力（Kräft）に他ならぬというマルクスの直観が示されているといえよう。それ故，問題は，転倒して発現するところの力を生み出す社会関係を解明することとしてたてかえられる。この課題は第二論文に引き継がれる。

第二論文においてマルクスは「ユダヤ人の解放されうる能力の問題は，ユダヤ教を廃止するためにはどのような特別な社会的要素を克服すべきかの問題に変る。」（同，p316）と述べる。そして「実践的，実在的ユダヤ教からの解放はわれわれの時代の自己解放である」（同，p316）から，この一文は人間的解放のために克服すべき社会的要素を検出するとの課題設定を意味していると見做してよい。

その「社会的要素」とは，ユダヤ教のうちにあった「一つの普遍的な現代的反社会的要素」＝「実際的必要とエゴイズム」に他ならない。政治的解放によって解き放たれた市民社会の「原理」はまさにそれであり，その意味では市民社会の「特殊な一成員」であったユダヤ人は，新しい市民社会の中で普遍的な存在となった（己れを解放した）と言える。

このような市民社会の「原理」把握は，すでに第一論文にも見られたが，ここではその「原理」にしたがって，市民社会の現実を整理しなおしている（同，p320）。それによれば，ユダヤ人の一神教は実際的必要，エゴイズムを土台とするために，現実においては人間は多くの「必要」を神とする。しかし，実際的必要と私利の神は貨幣となる。何故なら貨幣は普遍的な，それ自身のために制定された一切万物に通用する価値であり，逆に人間界をも自然をも含めた全世界は，その独自の価値，それ自身でもつ価値を貨幣に奪われているからである。それ故，もはやその神（＝貨幣）の前にはどんな神（多くの独自の価値に対する必要）も存在を許されないばかりか，その神（＝貨幣）は人間のあらゆる神々を貶しめ

て，それらを商品にかえる。即ち，貨幣とは人間の労働と暮し（Dasein）の人間らのものから疎外されたあり方なのであって，この疎遠な存在（fremde Wesen）が人間を支配する。にもかかわらず人間はそれを崇める。

禁欲して読んでも，貨幣の支配力の普遍化はすべての必要の対象を商品たらしめ，それ故，生産の目的も貨幣となるという関係をみることができよう。このことは，市民社会が商品，貨幣を媒介とする社会であるという認識は，市民社会の構造分析に着手した時点で得られていたことを意味している。

さらにマルクスは「人間の自己および自然からの自己疎外」（同，p323)が，市民社会の下で如何に現われるかについても言及する。重要な箇所であるのですべて引用しよう。

「ここにおいてユダヤ教は普遍的に支配する立場に達し，手放された（＝外化された，entäußerten）人間，手放された自然を，譲渡できるもの，売却できるもの，エゴイスト的必要にもてあそばれ，あくどい商売の餌食となるもの（商品，gegenständen）にすることができたのである。

譲渡することは手放すことの実践である。人間は宗教的にとらわれている間は，己れというものを何か己れとは別種の，宗教的なものたらしめることによってでしか対象化するすべを知らないのであるが，それを同じように彼はエゴイスト的必要の支配下にあっては，己が生産物をも己が活動をも何か余所のもの（fremden Wesen）の支配下に置いて，それに或る余所のもの－金（貨幣，Geld）－の意義を付与するというやり方によってでしか，実践的に己れをあらわすことができず，実践的に対象を作り出すことができないのである。」（同，p323～324）

次のことが確認できよう。第1に，ユダヤ教の支配，したがって貨幣の支配の下で，はじめて外化された人間と自然は商品となることができたこと，第2に，市民社会の下での対象化とは，自分の活動と生産物を疎遠なものの支配下におき，その意義を付与することに他ならないこと，である。ここで直接的生産過程が表象されていることは間違いなかろう。だとすれば，「疎遠なもの」の支配力は直接的生産過程にも及び，そこでは「対象化」が自己とは別種の「疎遠なもの」を作ることにならざるをえない関係が成立しているという認識をマルクスが形成していたといっても過言ではない（本稿4章参照）。

このことは，貨幣の支配を媒介にして成立する市民社会という認識は，今日言うところの商品貨幣論的視点のみからなされた把握なのではなく，直接的生産過程における「疎外」をも射程に入れた，その意味で統一的な視座からなされた認識であったことを示している。或いは貨幣を媒介とした物象化論と直接的生産過程における疎外論との統一的把握の原基的なあらわれとも言えよう。たしかに両者の関係は直観的に把握されているにすぎず，後者もまだ対立関係としては把握されていないが，ともかく，両者を統一的な論理で分析，把握することが試みられていることは確認できる。

以上の分析によって，マルクスは市民社会とは実際的必要とエゴイズムを原理とし，貨幣によってすべてが媒介される世界であることを明らかにした。その限りで人々が貨幣を崇拝する必然性，エゴイスティックな人間がこの社会システムに適合的である理由を示してはいる。しかし，ここから人間的解放

の必然性を導くことはまだできない。それは『ユダヤ人問題』に続く著作である『序論』との関連で言えば，市民社会の「特殊な一成員」であったユダヤ人の実践的精神がブールジョアの間で普遍化したことを確認したにとどまっているからである。

マルクスは『序論』で革命の担い手について，或る特殊な階級でありながら，社会の普遍的な欠陥，障害，矛盾がその階級に集中し，それ故，その特殊な階級の解放が社会の一般的自己解放をもたらす，そのような階級と規定している。ブルジョアジーこそは，政治的解放において一般的肯定的意義を有する階級として登場してきたのであるが，その前提は全社会がこの階級の立場にある（「例えば貨幣と教養を所有しているか，もしくは任意に獲得しうる」〔『序論』，p346〕）ことであると述べる。『ユダヤ人問題』においてマルクスは，社会の解放をめざすはずの政治的解放者が，エゴイストである「市民」を本来の人間とみなす転倒を指摘したが，その問題は『序論』におけるこのような指摘を経て，市民社会の普遍性を否定しその特殊性を明らかにすることに還元される。この特殊性を明らかにしてこそ，同じく特殊な階級でありながら普遍的人間解放を準備できる階級＝プロレタリアートの勝利の必然性を予見しうる。市民社会の転倒構造の問題は，今では特殊たる資本家が普遍として転倒して現象する点にその焦点をおいている。ブルジョアジーの普遍性を確認したにとどまる『ユダヤ人問題』の限界は明らかであろう。

市民社会における諸階級の利害関係を検討すること，それによって市民社会内部の普遍と特殊の対立関係を明らかにすること，これが『手稿』に課された課題である。

3. 市民社会の本質

『手稿』の検討はラーピンの説に示された執筆順序にしたがって行う。「第一手稿」においてマルクスは市民社会の三階級を私的所有者として同一視する国民経済学によりながら，三者の相互関係を解明していく。

まず，資本の利潤と地代を対比しつつ，前者は「普通の国民経済学的観点からみてさえ社会に敵対的に対立している」（『手稿』，p60，cf『この階級の利害はしたがって，他の両階級のようには，社会の一般的利害と同じ結合のなかにありはしない。……しばしばこれに敵対的に対立……』スミス，同，p59）とし，後者も現実の交渉の中では借地人と地主との間の闘争によって確定されるとする。その上で国民経済学の矛盾を次のように指摘する。「国民経済学のうちにわれわれはいたるところ，利害の対立，闘争，戦争が，社会的組織の基礎として認められているのを見いだす。」（同，p78）

次に労賃について，それは資本家と労働者とのあいだの敵対的な闘争によってきまると述べたあとで，結論的に「ただ労働者にとってだけ，資本と土地所有と労働との分離は，一つの必然的，本質的，かつ有害な分離である。」（同，p29）と述べる。その理由は何よりも労働者が一つの商品となっている。つまり他のあらゆる商品の存在の条件へ引き下げられていることに存在する。例えば，「労働者に好都合な

唯一の状態」である富が増進しつつある社会においても，労働者に必然的な結果は第1に過度労働と早死にであり，第2に以下のような事態である。

「(α) (資本と収入の増大が可能であるのは)たくさんの労働が集積されることによってである，なぜなら資本は集積された労働だから。したがって次のことによってである。すなわち，労働者の生産物がますます多く彼の手から奪い取られ，彼自身の労働がますます多く他人の所有として彼に立ち向かい，彼の生存(Existenz)と彼の活動との手段が，ますます多く資本家の手中に集中されるということによって。

(β) 資本の集積は分業を増進させ…(略)…分業は資本の集積を増加させる。一方ではこの分業と，他方では資本の集積とにつれて，労働者はますます労働だけに，しかも，ある特定の，一面的な，機械のような労働に，依存するようになる。こうして，彼は精神的および肉体的に機械にまで押しさげられ，ひとりの人間から，一個の抽象的活動と一個の胃袋になると，彼はまたますます市場価格のあらゆる動揺，資本の充用，富者の気まぐれに依存するようにもなる。…(略)…労働者のこの立場は，工場制度においてその頂点に達する。

(γ) …(略)…諸資本のあいだの競争はより大きくなり，諸資本の集中はより大きくなり，大資本家たちはより小さい資本家たちを破滅させるのであって，かっての資本家たちの一部は労働者の階級に没落する。この供給によって労働者の階級は部分的にさらに労賃の押し下げをこうむり，なおいっそう大きな程度で少数の大資本家たちへの依存におちいる。…(略)…したがって労働者階層の一部は，中くらいの資本家たちの一部が労働者階層におちるのと同様に，必然的に，乞食ないし飢餓の状態におちる。」(同，p34～35)

(α)，(β)は後の「疎外された労働」の第1，第2規定において表象されている状態であったとみてよかろう。この解釈にかかわって重要な点は，その「状態」が資本蓄積の進展との関連において述べられている点である。このことはマルクスはこの段階で「労働者と資本家との関係」を資本の蓄積と労働者の貧困化の関係として明確にとらえていたことを意味する。「疎外論」はこの関係の概念的把握をめざしたものであり，それ故，それは資本蓄積の概念的把握を目的としたものに他ならない(この点は後述)。

「地代」欄でマルクスは，競争によって資本家と地主の区別は消失し，したがって「市民社会(『手稿』ではほとんど使われないが)」には「労働者階級と資本家階級しか存在しない」との結論に達するが，これらの指摘を考えあわせれば，この段階で「市民社会」の「普遍性」の仮象の内部に，不可避的な敵対関係；資本ー労働関係が見い出されたことを確認してもよかろう。

しかし，プロレタリアートが如何なる意味で特殊＝普遍なのかを，ブルジョアジーが普遍であるとの仮象を否定しつつ解明するという課題は，これによって達成されたわけではない。それ故にマルクスは「人類の最大部分がこのように抽象的労働へ還元されることは，人類の発展のなかでどういう意味をもっているのか?」(同，p40)と，「国民経済学の水準よりも上に立って」問わねばならなかったのであり，その回答を試みたのが，「疎外された労働」欄である。

「疎外された労働」欄は，国民経済学，及びその言葉で語られる国民経済＝「市民社会」の批判の方法，或いはその本質把握の方法を示すものである。その意味では「第一手稿」全体が「市民社会」把握の課題と方法を示しているのであり，いわゆる第1規定から第4規定もこの文脈の中で評価することが必要であるし，またその意義と限界も「ミル評注」を含む他の手稿における展開との関連において評価されるべきであろう。

マルクスはまず，国民経済学者の限界を指摘することにより自らの課題を確認する。それによれば，国民経済学は私的所有が現実の中で経る運動の関連を理解しえず（貪欲と競争という外面的偶然的な契機による「法則」化，例えば需要と供給），それが私的所有の本質からどのように生じるかを理解しない。この批判は「市民社会」がその本質を隠すとの批判でもある。「第三手稿」においてマルクスは「そもそもわれわれが国民経済学者たちに照会するときはいつでも経験界の実業家たちのことを言っている」のであり「前者は後者の学問上の信仰告白およびあり方」であると述べているが，そうであるが故に，国民経済学批判は「市民社会」批判である。そして国民経済学が労働者を最も悲惨な肉体的生存維持の要求，最も抽象的な活動へ還元しながら，なおかつこのような生活も「また人間的な生活と生存であると言明し」，「普遍的尺度として算出する」(同，p168)とき，それはあの「政治的解放者」における転倒した意識，「市民社会」の「普遍性」という仮象を合理化せざるをえなくなる。それ故，マルクスは国民経済学の対象である「貨幣体制」（貨幣を媒介とする物象的関係，『手稿』p88，p90，「ミル評注」p90参照），つまり「市民社会」の転倒構造と「この疎外全体」との「本質的連関を理解しなくてはならない」(『手稿』，p97）と述べるのである。

マルクスはまず，出発点＝対象を「国民経済(学)上の現在の事実」として示す。そこで示された課題は，第1に，労働者が商品を生産すればするほど，自らを一層安い商品としていく関係，第2に，労働はその関係を再生産する，この2点の解明である。この「事実」を次に概念的に把握していくのであるが，ここで留意しておくべき点は，労働者が「商品」を生産するとの表現が，以後では消失する点である。国民経済(学)上の「事実」としては，労働者は商品を生産するのだが，同じく「事実」として資本も商品を生産すると言え，その限りで，資本と労働の区別は消失する。換言すれば，国民経済学では労働者の創造するものは「事物世界（Sachenwelt）」[(1)]に属する商品（＝Sache）でしかなく，DingがSacheになる関係を理解できない（「国民経済学は労働者（労働）と生産とのあいだの直接的関係を考察しない」）。

マルクスは第1の関係とは「労働が生産するところの対象，労働の生産物は，労働に対して，ある疎遠なもの（fremde Wesen）として，生産者に依存しない力（Macht）として立ち向かうということ」（同，p98）に他ならないと述べる。そして，「労働の生産物」を「労働が一つの対象のうちに固定され物的（Sachlich）ならしめられたもの」，「労働の対象化されたもの（Vergegenständlichung）」であり，換言すれば労働，或いは対象化とは，一つの対象（Ding）を「物的」（Sachlich，ここでは社会的規定性をうけたDingとして理解）ならしめることであると規定したうえで，国民経済学的状態にお

ける労働の実現について述べている。

ポイントは国民経済学的状態を述べた二つの文章の間に挿入された労働の一般的規定である。「虚構の原始状態」に身を移さぬ限り，人間の労働は類的諸力の発揮であり，その意味で常に社会的である。それ故，労働，対象化は，それが如何なる関係（類的関係も含めて）であるかは別として，ともかく社会関係を反映するSacheを生み出さざるをえない（Dingの生産＝Sacheの生産）と言えよう。それ故，問題はそれが如何なる社会関係であるかという点にあるが，いわゆる国民経済学的状況では，それは「対象化が対象の喪失および対象の奴隷」となるという主客が転倒した関係となっている。つまり，Sacheが fremde Wesenになる関係である。それ故，この関係は「事物の疎外（Entfremdung der Sache）」と規定される。

但し，ここでのSacheは商品ではない。すぐ次のパラグラフ（同，p99)にあるように「彼の生産物，つまり資本」であり，先に「労賃」欄を検討した際の(α)がこの箇所と対応する。即ち，「事物の疎外」という関係の下では，「人間が神の中へ入れるものが多ければ多いほど，彼が自分自身のうちに保持するものはそれだけ少ない（神と人間との関係が前提されていることに注意）」ように，「彼が自分の向こう側につくりだす疎遠な，対象的な世界」である資本は，彼が働けば働くほど蓄積されて強力になる。『ユダヤ人問題』第二論文においてすでに，エゴイスト的必要の支配下においては自分の生産物も活動も，余所ものの支配下において，その意義（貨幣）を付与するというやり方によってでしか，実践的に対象化することはできないとの指摘（『ユダヤ人問題』，p324）が見られたが，ここではfremde Wesen＝資本とする点において明らかな前進を確認できる。

さらに前進は次の点においても明らかである。マルクスは以上で述べた関係は「同時に，感性的外界にたいし，自然諸対象にたいして，ある疎遠な，彼に敵対的に対立する世界にたいしてのようにふるまう（関係行為する－引用者）ところの関係である」（同，p104)と述べる。具体的にはこの関係の下では，労働者は自然の提供する生産手段を二重の方向，即ち，労働に所属する対象，労働の生活手段と，直接的意味での生活手段，労働者の肉体的生存にとっての手段の二方向において奪われる（同，p100)。

労働者の生活手段（後にいう生産手段と狭義の生活手段）からの分離をこの「関係」＝資本の蓄積過程は生み出すとしている点に注目すべきであろう。そうであるが故に労働者は労働の対象と生存手段をもらわねばならず，対象の奴隷とならざるをえない。先にみたように主人となる対象は資本に他ならない。生産物を資本として対象化せざるをえない関係は，同時に労働の対象（後の生産手段）が資本として現われざるをえない（類的普遍性を示すSacheが，資本というSacheとして現われる)関係である。「労働がその諸生産物にたいする直接的関係は，労働者が彼の生産の諸対象にたいする関係である。」（同，p101)とはこのように解釈すべきであろう。このように見てくれば，いわゆる第一規定は決して「労働過程における疎外」ではなく，再生産論視点を含んだ蓄積論(『資本論』で言えば第1巻・第7篇「資本の蓄積過程」)を「労働者の側から」（同，p113)考察したものといえる。生産物がどのようにして資本に転化するのかは勿論，まだ解明できていないが，資本の蓄積とプロレタリアートの蓄積の関係を概念

的に把握しようとした第一規定こそが，四つの規定の中でも中心的な位置を占めることが確認されるべきであろう。

生産物の資本への転化の論理の解明は，いわゆる第二規定（労働の活動そのもののなかでの疎外）において試みられる。マルクスは問う，「もし労働者が生産の行為そのもののなかで自分を自分に対して疎外しないとしたら，どうして彼は彼の活動の生産物に対して疎遠に立ち向かうことがありえようか」と。しかし，労働の外化として述べられている事態は，生産物が疎遠な存在たる資本に転化する論理，或いは第一規定の「関係」の成立根拠そのものを明らかにするものではない。自由意志的ではなく，強制された労働であり，自由な精神的肉体的エネルギーを発展させるどころかそれらが荒廃，衰弱していく，或いは労働の中で他人に属するという文脈から第一規定を導くには幾つかの媒介項が必要である。とはいえ，以下は確認できよう。

ここで述べられている諸点は，内容的には精神労働と肉体労働の分離，対立に他ならない。その意味で先の「労賃」欄，(β)（同，p34）がここに対応する。(β)では資本蓄積と分業によって，労働は特定化，一面化され，機械のような労働になり，人間は精神的，肉体的に機械にまで押しさげられ，一個の抽象的活動と一個の胃袋になる，そしてその完成は工場制度であると述べられていた。これを見る限り，第二規定では工場内分業が表象されていたと見てよかろう。このように見れば，マルクスが「ちょうど宗教において，人間の空想，人間の脳髄，人間の心情の自己活動（精神的諸力があげられている点に注意）が，個人から独立に，すなわち，ある疎遠な，神的あるいは悪魔的な活動として，その個人に作用するように」(同，p103)，労働者の活動は他人に属すると述べているのも，資本主義的協業に固有な資本家の専制的な指揮，監督機能を表象していたからであると解釈しうる。このような解釈に立てば，第二規定では後に相対的剰余価値論において展開される工場制度の発展に伴う資本の支配権の確立を，さしあたり労働者の自己疎外として把握することが意図されていたといえる（平子氏の「直接的生産過程における疎外論の発展」札幌唯物論研究会『唯物論』第30号，1985 を参照されたい）。上述のように，ここから直ちに第一規定を導くのは難しいが，資本の支配権の確立が第一規定の関係の前提であることは確認してよい。

以上の両規定こそが資本主義社会（「市民社会」）の敵対的関係を解明するためのマルクスの方法論であろう。但し，それは直接的生産過程における敵対的関係を明らにするにとどまる。「労賃」欄で立てた課題，即ち，人類の大部分が抽象化された労働に陥ることの意味を解明するという課題にはこれだけでは回答できないし，また，「市民社会」に現象する様々な社会関係を解明する（これが初発の問題意識）方法もまだ示せていない。

そこでマルクスは第三規定（類からの疎外）を「両規定から引き出」す。ここでの獲得目標は人間と自然の物質代謝の本源的形態が第1，第2規定の「関係」を前提とした場合，どのように現象するかを明らかにし，それによって，「市民社会」の特殊性，労働者解放の普遍性を明らかにすることにあったといってよいであろう。いわば，「生産力」の解放の展望を示す方法を確立する点にあったのである。

人間－自然の物質代謝をマルクスは「類的生活」と表現する。その特徴は自然に対しても，したがってまた人間，自分に対しても普遍的に，自由にふるまえる点にあり，それは人間が意識的な生活活動をもつこと，そしてその実践的表現として自然を(1)直接的生活手段，(2)人間の生活活動の材料，対象，道具にすること，の2点に示される。マルクスによれば「人間は，まさしく対象的世界の加工形成のなかではじめて現実的に，一つの類的存在としての実を示す。…この生産を通じて自然は人間のした仕事および人間の現実として現われる。したがって労働の対象は，人間の類的生活の対象化されたものである。というのは，人間は自分を，意識のなかでのようにただ知的にだけでなく，仕事の活動で現実的に二重化するからであり，したがって，自分によって創造された世界のなかで自分自身をまのあたりに見るからである。」（同，p107 ここで注意すべきは，「自然」とは人間にとって対象的となりうる「自然」のことであり，それ故，人間が「普遍的であればあるほど非有機的自然の範囲もますます普遍的」になることである。この点に，「第三手稿」においてマルクスが自然科学や産業を評価する根拠を見い出せる。）

人間は，まさにそのような存在であるが故に，(1)生産の対象，自然を奪われ，(2)自己活動，精神的な類的能力を奪われる，という二つの疎外によって，類的生活を疎外し，個人的生存の手段としてしまう。人間は意識的存在であるからこそ，このような転倒した関係においても生産できるのであるが，「人間が類についてもつ意識」が転化するのは，第一，第二の疎外の故である点（同，p108）に注意すべきである。即ち，人間の，己れの普遍性に対する意識が転倒するのは，何よりも直接的生産過程における疎外（（第一，第二規定）に起因する。この点については後述する。

以上のように，「類」という視点から第一，第二規定をとらえかえすことによって，文字通り，「市民社会」の人類史的視点からみた特殊性，転倒性が明らかにされる（後の生産力概念の形成との関連を考える場合，すでに「生活活動の材料，対象，道具」に類的普遍性が実践的にあらわれると述べている点は注目されるべきであろう。この点については他日に検討を期したい）。

さて，以上の三規定で「市民社会」の敵対的性格，及びその転倒的特殊的性格を把握する方法を示したマルクスは，次に「市民社会」の諸関係を分析する方法を第四規定（人間からの人間の疎外）において示唆する。「一般に，人間から彼の類的存在が疎外されているという命題は，ある人間が他の人間から疎外され，また彼らの各々が人間的本質から疎外されている，ということなのである。人間の疎外，一般に人間が自分自身にたいして立っているあらゆる関係は，人間が他の諸々の人間にたいして立っている関係のなかではじめて現実化されており，表現されるのである。」（同，p108～109）

この規定は，たしかに第三規定の「直接的帰結」とされているが，それ自体で資本－労働関係を分析する新たな視角を示したものとはいえず，先述のように様々な形態をとって現象する人間と人間との関係を分析する視点，その意味では第一，二，三規定から上向していく方法を示したものであろう。マルクスは「疎外された労働」概念の分析のあとで「この疎外された，外化された労働の概念が，現実のなかではどのようにおのれを表わし示さないではおかないかを見よう」（同，p110）と提起するが，そこで

駆使されるのがこの規定であることにもこの点は示されている。いくつか引用すれば「実践的現実的世界のなかでは自己疎外（自分および自然からの－引用者）は，他の人間たちにたいする実践的現実的な関係を通してのみ現われることができる。疎外がそれを通じて起こる仲介が，それ自身一つの実践的な仲介なのである。」（同，p112）「したがって人間は……彼の生産と彼の生産物にたいして他の人間たちが立っている関係をも，そして彼がこれらの他の人間たちにたいして立っている関係をも，（実践的に－引用者）生み出すのである。」（同，p113）

「疎外された労働」とは一つの「関係」であった。そこで示されたのは「概念」としての「関係」である。それは「実践的現実的な世界」では「実践的現実的な関係」を通してしか現象しないのであり，それ故，逆に「実践的現実的な関係」とは「疎外された労働」という関係の現象といえる。(2)

このような把握の重要性は，「現実」＝「国民経済学」の批判を展開していく中で示される。マルクスは，以上の関係を前提にして，まず私的所有は疎外された労働の所産，帰結であると述べたあと（これ自体が国民経済学の批判である），国民経済学の目に写る私的所有と「労働」との外見上（Scheinbare，仮象上の）矛盾とは「疎外された労働のそれ自身との矛盾」（同，p114）であり，「国民経済学はただ疎外された労働の諸法則を言いあらわしたにすぎないこと」（同）を指摘する。またプルードンに対し，「労賃と私的所有は同一である」（ともに疎外された労働の所産であるから）が故に「賃金の平等」は人間の奴隷状態を解放したことにはならないと批判する。

そして何より重要な指摘は「社会の私的所有等々からの，奴隷状態からの解放は，労働者解放という政治的形態で現われるということ，だがそれは，あたかもただ彼らの解放だけが問題であるかのようにではなくて，彼らの解放のうちに一般的人間的な解放がふくまれているからであり，この解放がそのうちにふくまれているのはしかし，人間の奴隷状態全体が，労働者の生産にたいする関係のうちに包含されているからであり，すべての奴隷関係は，ただこの関係の諸々の変形および帰結にすぎないからである，ということ」（同，p115～116）であろう。この結論こそ，『ユダヤ人問題』，『序論』を通じてマルクスが追求しつづけたものに他ならなかった。市民社会の仮象的諸矛盾の解明に悩まされたマルクスは，「疎外された労働」概念によってその解決を一応果たしたのであり，それ故，「疎外された労働」概念こそが市民社会の本質を把握する上での方法上の鍵なのである。

とはいえ，「すべての隷属関係は，ただこの関係の諸々の変形および帰結」であることはまだ証明されていない。国民経済学の内在的批判を完遂するためには，「疎外された労働」概念，およびそれによって獲得された「私的所有」概念の両因子によって，すべての国民経済学的カテゴリー（例えば駆引き商売，競争，資本，貨幣 etc.）を展開することが必要であった（内在的批判であるが故に国民経済学的カテゴリー，例えば「私的所有」を用いることになる）。この課題は「ミル評注」以後の手稿において果たされる。

4. 国民経済学批判の展開 ― 「交換」，「貨幣」

まず，「ミル評注」における「交換」，「貨幣」の分析視角を確認しておこう。マルクスは「生産そのものの内部での人間の活動のおたがいの間での交換も，人間の生産物のおたがいのあいだでの交換も，ひとしく類的活動であり，類的享受」（「ミル評注」，引用は『経済学ノート』，杉原四郎，重田晃一訳，未来社，1970，p96，以下頁数のみ記す）であり，人間の本質は真に共同的な存在（Gemeinwesen）であるが故に，人間はその本質の発揮によって人間的共同体（Gemeinwesen），社会的組織（gesellschaftliches Wesen）を生み出すが，「人間が自己を人間として認識していず，したがって世界を人間的に組織しおえていない間は，この共同的存在は疎外の形態のもとにあらわれる」（同，p97）と述べる。何故なら「（フォイエルバッハのように－引用者）抽象態における人類ではなくて，現実の，生きた，あれこれの個人としての人類がこうした共同的存在の本質」（同，p97）だからである。それ故「人間が自己自身を疎外するということと，この疎外された人間の社会は人間の真に現実的な共同的存在の，つまり人間の真の類的生活のカリカチュアであるということは……一箇同一の命題である」（同，p97）と言いうる。にもかかわらず，「国民経済学は社会的交通の疎外された形態を，本質的で根源的な，したがって人間の人間としての在り方にふさわしい形態として固定」（同，p98）する。

以上がマルクスの分析視角＝国民経済学批判の方法である。先述の「上向」方法をここに再確認できる。

「一箇同一の命題」であることの証明は，発生史的方法をとることによって試みられている。出発点は国民経済学にしたがって私的所有におく。そこでは所有と労働の同一性が前提される（「財産の排他的占有によって自己の人格性を確証」〔同，p98〕）。その上で，分析されるべき事態を次のように限定する。即ち，「私が私の私的所有を私との関連においてのみ外在化するとき，私はそれを外在化された事物（Sache）一般として措定したにとどまり，またそれにたいする私の人格的な関係（persönliches Verhältnis）を止揚しただけのことであって，要素的な自然諸力に返還した」にすぎないが「私的所有が私の私有財産でありながら，だがそれにもかかわらず総じて私的所有であることをやめないとき，つまり，それが私以外の他の人間と，かつてそれが私自身に有していたのと同一の関連をむすぶようになるとき……そのときにだけ，それは外在化された私的所有」となり，外在的な事物（Sache）となる。考察の対象は，「要素的な自然諸力」，「事物一般」を措定する行為（「単純な私的所有」）ではなく，相手との人格的な関係を結ぶところの「事物（Sache）」を措定する行為である。

交換の最初の契機は「両者の私的所有の素材をなす対象の特有の本性」（同，p100）に対する欲求である。それに従って二人の私的所有者は，自分の私的所有の一部を放棄し，他者において外在化することになる。この交換＝外在化された私的所有の成立は次のような事態を意味する。第1に，私有財産はかつての占有者にとっては，人格的な意味を喪失していること，第2に，双方の側で，私有財産は各々の本性を有する私有財産を代表するものとして，他の自然生産物の「同等物」として現象し，第3に，

双方が相互に関連させられあう結果，各々は他者の「定在」を代表し，私有財産の私有財産としての定在は「代理物」，「等価物」となる。

「等価物」としての私的所有は，自己自身との統一ではなく，他の私的所有に対する関係として存在するにすぎず，もはやそれ「固有の定在」ではない。私的所有は，相対的な定在である価値としての定在となり，その直接の定在と二重化することになる。

この過程を労働の側面から見れば，それは「営利をめざす労働」の展開過程に他ならない。つまり，第1に，営利労働は労働者の欲求と労働の規定性とに直接の関係をもたない（「労働者に疎遠な社会的連絡」による規定）。第2に，生産物を「買うもの」が自分では生産しないで他人が生産したものを交換取引する。その下では生産物は「価値，交換価値，等価物」として生産され，生産者に対する直接的享受，人格的な欲求のために生産されるのではなくなる。

ここでは「買う者」と「生産者」は区別されていると見て良いであろう。そのように見れば，この過程は所有と労働の分離の過程に他ならない。形態的には分離していなくても，「交換」の展開とともに両者が内容的に分離していかざるをえない論理が示されている。所有と分離された労働，「営利労働」の性格についてマルクスは次の4点を指摘する。第1に，労働主体（この表現にも注意）からの労働の疎外，第2に，労働の労働対象からの疎外，第3に，疎遠でかつ強制に等しい社会的諸欲求による労働者の規定，第4に，労働者にとっては個人的実存の保持が目的となり，真に現実的な行為は手段とみなされるという逆転。この労働が疎外された労働に他ならないことは明らかであるが，「社会的欲求」が強制力として働くとされている点には注意すべきであろう。この「社会的な力（gesellschaftliche Macht）」が，私的所有を媒介に（現象的には）労働者に立ち向かう。

「価値」としての私的所有の定在から発するこの「力」は，分業（社会的分業）の進展に伴い，生産の目的が「等価物」から「貨幣」に変ることによって，貨幣の支配力として現象する。「疎外された事物（Sache）の人間に対する完全な支配」（同p105），換言すれば「人格の人格にたいする支配としてあるものが，いまや事物（Sache）の人格（Person）にたいする，つまり生産物の生産者にたいする普遍的な支配となっている。…貨幣はこの外在化（私的所有の外在化－引用者）の感性的な，文字どおり対象的な定在である」（同，p105）。

貨幣の力とは「社会的な力」＝物象的な力に他ならず，それはまた生産過程における労働を支配する。貨幣の力が資本の力に転化する論理（貨幣の資本への転化，それに伴う物象的力の資本の権力化の論理）を欠くとはいえ，労働と所有の分離による「社会的力」＝貨幣＝資本と労働の疎外との発生史を確認すべきであろう。「労働の自己自身からの分裂＝労働者の資本家からの分裂＝労働と資本との分裂」（同，p105），マルクス自身のこの言葉がこの過程を要約する。そして，我々はここに疎外された労働の発生の秘密をも確認できる。

「ミル評注」を私的所有者同士の交換論としてのみ読むのは正しくないであろう。価値論，さらには貨幣の資本への転化論（『資本論』第一巻第一篇，第二篇）の端緒として検討されるべきであるように思われる。

5. おわりに

本稿ではマルクスの経済学研究の課題を市民社会の転倒構造 ―個人的生活が目的となり類的生活が手段となる，「市民」が本来の人間とみなされ，市民社会の完成は人間の普遍的な解放であるとみなされる ― の解明，及びそれを通じて真の「人間的解放」の必然性を解明する点にあったことを確認した。「第三手稿」において，その転倒性の学問上の反映である国民経済学が再度批判され，さらに「人間的解放」との関連で人間の意識についても論じられるのは，以上のような初発の問題意識との関連の故であろう。「彼らは私的所有をその活動的な姿において主体とし，したがって人間を本質とすると同時に，一つの非本質としての人間を本質とするのであるから，現実の矛盾は，彼らが原理として認めたところの矛盾に満ちた本質に完全に照応している。産業の分裂した現実は，彼らのそれ自体のなかで分裂した原理を反駁するどころか，確証する。彼らの原理は，じっさい，この分裂性の原理である。」(『手稿』, p 137)

マルクスはこのように国民経済学によりながら，その(＝市民社会の)仮象的諸矛盾は資本と労働を同一視する限り解決できないことを見抜き，その関係を概念的に把握，即ちその関係の本質を把握する方法を模索した。その方法が「疎外された労働」の四規定に他ならない。本稿ではこの四規定，及び「ミル評注」も含めて，それらを資本蓄積論の端緒的な分析視角の提示と理解した(たしかに労働者の側からの分析ではあるが，それは労働者解放の普遍性を証明するという課題に対応してのことである)。勿論，『資本論』との対比でいえば第1巻・第7篇→第4篇→第1・2篇へと「上向」していく『手稿』の方法は体系性を持ちえていないことは言うまでもない。特に所有の力が物象的な力となり，さらにそれが資本の権力として労働者に敵対してくる論理，換言すれば貨幣の資本への転化論を含む資本蓄積論の解明は，価値論，生産手段概念の形成をまたねばならない。しかし，市民社会の本質を資本蓄積論的視点で把握しようとしていたことは，マルクスの経済学批判体系の礎石が『手稿』段階で据えられていたことを意味するといっても決して過言ではないと思われる。

また，第三規定において後に生産力概念へと発展する人間，自然の物質代謝論がこれも端緒的ではあるが展開されている点，及びそれが「疎外論」の中で展開されていることの意味にも注意すべきであるが，この点の検討は今後の課題としたい。

最後に，疎外論と物象化論との関連については筆者自身の蓄積が不十分なため，これも今後の課題とせざるをえないが，先述の所有の力→物象的力→資本の権力という関連において，両者の関連を考えることが必要と思われる。このことは，いわゆる商品・貨幣論視点と所有・階級関係視点とを統一的に理解することにもなると思われるが，この点も今後の課題としたい。

註

(1) Sache と Ding の区別については，平子友長「疎外論と物象化論」(『経済理論学会年報第21集』，青木書店，1984)，山本広太郎『差異とマルクス』(青木書店，1985)を参照されたい。尚，本稿は二氏の諸論稿に多く触発されている。

(2) この意味において，フォイエルバッハ第六テーゼ「(人間の Wesenは)その現実の姿では，社会経済関係の総体である」は，この第四規定と同義とみてよいと思われる。それ故，問題は「この現実的なWesen の批判へ乗り出すこと」＝疎外され労働の関係を明らかにすることにある。あえて「本来の姿」を求めるなら第三規定がそれにかかわるであろうが，それを見い出すことよりは，「現実の姿」がどのように矛盾した姿なのかを明らかにすることが重要であろう。